

東奥日報

2021年(令和3年)3月28日(日曜日) (27)

平内・旧浅所小

ハクチヨウ観察55年間のデータ

英文論文学術誌に

1956(昭和31)年から55年間にわたり、平内町の浅所小学校児童が続けたハクチヨウの観察記録が論文として英文の学術雑誌に掲載され、インターネット上で公開されている。専門家によると、一つの生き物を長期的に観察したデータは珍しく、学術的価値があるという。観察記録をデータ化した平内町白鳥を守る会の小形正樹理事は「脈々と続いてきた児童らの取り組みが認められ、町の自慢になった」と語る。

(小松廉)

守る会「町の自慢」

浅所小は、地域への理解を深める教育の一環として、同町浅所海岸に飛来す

るハクチヨウの観察を毎年行っていた。ハクチヨウが飛来する10月～翌年3月

のほとんど毎日、観察していた年もあったという。児童は、その日の気候や成鳥・幼鳥の羽数、生息していたエリアなどを手書きで記載。延べ約2千人の児童



【写真上】浅所小学校の児童によるハクチヨウの観察記録。生息していた場所や成鳥・幼鳥の羽数などが記録されている【同下】昭和50年代に撮影された、ハクチヨウと触れ合う浅所小学校の児童(平内町白鳥を守る会提供)

の手による記録のファイルは約50冊に上り、現在は町教育委員会が保管している。

守る会は、2012年3月の浅所小閉校から10年を迎えるのを機に、観察記録をデータ化しようと、ハクチヨウが飛来した最初の日、羽数のピーク日、最後に飛び立った日などを約2年間かけてまとめた。

このデータを、動植物の生態に詳しい八戸工業大学の田中義幸教授が英文の論文に仕上げ、学術雑誌「Data in Brief(データインブリーフ)」と掲載交渉などを行った。

田中教授は「生き物の個体数を長期的に記録することは難しい。50年を超える観察データによって、いづれだけのハクチヨウが飛来したかが分かる。詳しい気象情報や土地開発の歴史など、他のデータと照らし合わせることで、さらにさまざまなことが分かる」と話した。

守る会によると、浅所海岸に飛来するハクチヨウの数は減少傾向にあり、現在はピーク時の3分の1程度の200～300羽だという。小形理事は「ホタテ養殖が盛んな平内町は、海岸でハクチヨウと共生している。これからも観察や海岸清掃を続けてハクチヨウを守り、(個体数を)増やしたい」と話した。

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」